玉の

十七

哥沢名ごせつ

[v.22]

PL788
.4
.G4
1654
vol.22
copy 1
Asian
Japan
Cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

年月へだて里ぬれど、あらざりしながれを露
ワ見れ給ひもず。ろろぐるる人の有様どもをこゝのひ
かさぬるまつけても、おろましかばと哀にふち
おしくのこゝおぼしいづ。右をいちまのひとすぢなら
ねどお紙そのるゝことこゝのひてうつくしきものに
おぼしこれば、ふるべのすまはかうまの里なれ
ぬり。すまのれうのろひの程に。こゝのうへのれうる
まこれ人ご写しワうし給し程より。そなるに
きゝふ。心よくかひそめうる物に。女君もおぼし
これど。心のうちには古君もおし給ひましかば。
おしのれうるぞうのおぼしにはをとる給も

ざらまし。さしもふかき(深ノ)れ心ざしなりけるをぞ。
おもしあぶさず。さりきてめ給れ心なるべき歟それ
ぞ。まひてやんごとなきけらにこそあらざらめ。
この(六条院)れとのうつりのかずのうちには。まじらひ給な
ましとせふに。あかずかなしくなんせひけな。かれ
(ホ)西の系にとまりし(むかづら)ぬ君をぞ。ゆく思もきらず
ひとへに抱をせひけるに。又と更にかひなきことに
よりて。ひがなもしすなとくちがるめ給しを。もぐ
かりきえて。さぐ○ても書づれ罪しざりし程に。
(夕ぎ)その(ゆめれとこ)れめれとのおとて。(せうに)少弐になりて(はてへ)いきかれぞ。
(めれとこ)くりにかり。かれ(むかづら)ぬ君のよ(四ヶ)けりなりさしぞ

けくしへきいきけり。母(タ行)君の(めれとん)れり来をしらんと。
よろげの神佛に申て。よろひうるき忘て。さるべき
所をさづ口きたしかれど。つゐにえきくいでず。
さらがいりぐいをん。門(むぐら)君をぐまとそ。れうこと
にこなしめ。おやしきこちにそへなりて。ちうう
なるほどにおもしをんことれうしきことなどを。
ちくぞ君にほのめかさんとせひかれど。さるべき
さよりもちきうちに。ちくぞ君のおりしかんかるも
しらず。さづ口とひ給ひぐいりぐきこえん。又よくも
こちれぬもぬに。おさなき人をとぐめてまつり給
もんも。うしろめるうるべし。しりちぐうもるゐて

ぐぐりねと。ゆるしぬふべきまもあらずなど。をのが
ぢくうらひあれきて。いとうけくしうこゞいまうら。
けるかくきたらなるれさまに。ことなるしつらひ
なき舟にのきて。漕出るほどは。いと哀になんおぼし
けるおさなき心ちに。たゞ君をのみれど。おりくに
しのれもとへいくかと。たひぬふにつけて。なにぐ
さゆる時なく。心すめだもちひこゞろをふるふち
ゆしとかれはいさめそり。おもしろき所とそ
つ。こゝろのうちおもしもれを。かうこちをも
こをなる地にもがれ。おのをましけば我ホはくらう
さらましと。京のうるとちひやうしに。入る波も

うらやましく心ぼそきまゝ舟子どものあらくしきさ
声にて。うらがなしくもとをくきこゆけるかれと。う
ふ代きくまゝに。つくりさしひかひてなきかなる
舟べも誰をうふとゝ物は鳴の海がなしげに
し急のきこゆる
来しかたも引来もしらぬおきにいでく
あられいづくに君を思ふらんぴなれ別にをのがぢく
ころをやすていひけるが。のこさ記るて。まれも
けれぞなど。夜と君のことくさまなりて。うし
ろまいたりつきていまいてもうかなる程をおもひ
やすて。こひなきて。この君をうしづき拍にてあし

くらす。夢(ゆめ)などに。いとこ面さうにこえ(夕ばノ)給時などもあるを。
おなじさ面なる女などそひ申てこえ申へば。名抄
四ちあしくなやこなどしければ。れよりなく奴給に
けるなりとしひなるも。いうじくのこなむ。お気
にんしてくのぼりなんとするに。たうけき程に。こと
なるいさほひなき人も。こもこひつく。しらくしく
もいでこぬ程に。をもきやまひして。しなんとする
四ちにも。此(玉)君のとをぞりにもなりぬへるさ面の。
ゆゝしきまでおしげなるをこなりて。(お気羽)我さへうち
(まて)拾なりて。いかなるさ面にもぶれ給もんとすらん。
あやしき事におひ出給も。かうじけなくはもひ

きこゆれど、いつしかも京にゐてなりて、さるべき
人ぐにもしらせなりて、はすくきにまゐきてこなしん
にも、却ハひろき所なれば、いと心やすうるべしと、
せひいそぎつるを、うくなるがら命こんどなりぬる
ことく、うしろめたがるを、地のうぐ三人おるに、お武詞こゝにこれ
姫玉君京にゐてなるべきことをせん、我身のけうをば、
なおもひそとなんいひ並けるそ地のひとの御子とは、
こちの人にもしらせず、こゝにひまぞのうしげくべき
ゆへおるとぞいひなしかれば、人りこきず、うぎるし
なくかしづき男ゆるほどに、お武にうをぬれば、喜めれと
心ぼそくて、こゝ京のいでこちをすれど、此お武の中

あしかりけるゝ人の人おほくなどして、とき後かう
ざ後におぢたゞかりて、我にもあらで年をすぐ
すに、此君ねびとくのひ給ふに、たゞ君よりもまさ
りてきらゝにちゝおとゞのすぢさへくたられば
まや、志れたくうつくしげなり、心だせおほきに
あらまほしう把しぬふ、きくいつゞ、きいたれ
ぬるゝ人どもこゝろかけきこそてがういとおほかり、ゆ
ゆしくめざ後しくおぼゆれば、これもくきくい
わぜ、かたちなどはさてもきぬべかれど、いうじき
かたちのあれば、人にもきゝであまにはしてゝ、ちが
よれ限いもたゝんといひちらしたれば、故お気の

むまごは、かくはなんあるゝおくしもれをといふ。
ゆめもゆくしく、いさ両にして都にゐてなりて、ちく
おとゞにしくしをなくん、いとゝさなき程をいとらう
くしとしひこさえゐへりしかば、さはともをろう
にはしひ捨きてし給ひしなどいひなげくほど、佛
神に願をたてくなん念じけるむすめだもをのこ
だも、所につけるよすがどもいできて、すこつきな
かり心のうちにこそいそぎおもへど、京志こしとは
いやとをざるやうにへぐくはゆく、ものおぼし
しるまゝに世をいとうき物にりおぼして、ねさう
などし給ひたちだるまゝなり給まくり。

おひさくのぼりて。いとあたらしくめでたし。この
まむ所は。肥前(ひぜん)の国(くに)とぞいひける。そのまたりにも。
いさゝかよしある人は。まづこのか紙のむまごれ
ありさ間をきてつゝみて。我たゞぎをとづれらるも。
いというじうしうしうましきまでなん。大夫(たゆふ)乃
げむとて。ひごの国にぞうひろくて。うしろにつけ
てはおぼくあり。いさゝかひいかめしき。いとも我を
なり。むくつけき心のあるに。いさゝかすさまる心志
まじまりて。かたちある女をあつめてこんとしひける。
此姫(むこ)君をさ(大夫監)つけて。いうじさうたまはりとも。我は
ふくしてもたらんと。いとねんごろにいひかる。

いとむくつけくもひて。いかでかゝることをきかで。
おまゝ姫なんとすといはをかりかれ（大史監ム）いよくおやう
がりて。をして此国にこえきぬ。このおのこどもをよび
よりてかゝらふことは。（大史監訂）せふさ海にありなば。かなぐ
めにいさほひをかちすべきことなどかたらふ。
ふたりは（冷郎と三郎とえ）をもむきにかり。（訂）せざしこそにげなく哀と
思へしかれ。をのく口がきのようべとこれまんり。
いとこれもしきひとなり。これにおしくきしれては。
このちかきせかいにはめぐらひなんや。よきひとの
れすぢといふとも。おやにかずまへられなしらぜ。
よにしられでは。なにのかひにはあらん。このひとの

くねんごろにおもひきこえしぬへ事とそ。いまは此
さいをいなれ。さるべきまてこそ。かゝ事せかいり
もおりしまし分めにげかくれ給ともなるのこけき
ことかはあらん。まけじこましぬりいかなるなれば。
きぬことゞもこそしてんといひおどきば。いというゞ
ときて。なれこの(太郎之)をなり。ぶざ(考後)のきけなん。(詞)なれ
いと無いぐしく。あたしきことなり。故か氣乃
の給ひしこともあり。とくゝまへて京にあげなり
てんといふ。むすめぞもなきまどひて。(夕方)たゞ君のうひ
なくてきすしへなて。引米をぞにしらぬかなるに。
人なるくまてこそ(ひと)なんとこそせり。(監ゲラリ)さるもれく

ちりまちびつら給ひなんことく。しひちげくをもしらで。
大夫監ん
我はいと思しうさ身としひて文などしてせうす。
身などさくちげちうかさて。かうの志さし。かうぢし
さうはいれしめ何くおしくかさうとおもひ
うる。玄葉ぞいとごこうける。監ぢうもこれ氣の
ぢらうをかうしひとりて。打つれてさうり。地年三十
ぢりちうおのこの。けうく抽くしくふとりて。
さくちげちけれど。おもひちしうとましく。おらうか
ちうかまひ。うもゆくしくおぼゆ。いろおひ
こちよげは。声いうれてさえげ。ねうる。
監司
けさうぐは世はうれうをこそ。よぢひとはいひ

それさまかへたる妻の夕暮なり。秋なるのどもおや
しかりなりとこそ。こころをやぶらじとて。をばれ（めれとくす）
とぐいであふ。故（監司）か武のいとなさけび。さらくし
く抱しめしを。いかでかあひかたらひ申さんと
なまひたまへしかども。さらこころざしをもこそを
思ひ寄侍し程に。いとかなしくてかれ治ましを。
そのかたりに。いかうに。いかうまいかに為くなん。
心ざしをもげまして。かふもいとひたふかなり
しぬてさふらひつる。このおりしますらん女（む）君。さらぢ
ことにうけ給されば。いとかたじけなし。こゝなに
がらがつたくしのさことしひまうしていたゞきに

なんさげなるべき。おとぐ（めれとと云之）もしぶくまおりしげ
なることはよろしぬ女などもあまるあひしりて侍を。
きうしめしうとむなるまさりともすやのぢらを。
ひとしなるまは志侍りなんや。つぎ（ぎ）をば。きさきの
ムゝねまおとしまらじ抱をやなど。いとよげまいひ
つぐ。いかぐ（めれと詞）はかくのなふを。いとさいたいあるまと
志給家を。すくをつるなさへまや侍らん。せひまぐ
うること侍りて。いかでかへまはらんぞられんと。人
しれずなげき侍めれば。心ぐるしうこのへまげらひ
ぬるといふ。さらまなおぼしもぐりそ。天下ア
めつぶれ。おしおれのへりとも。なまがしはのうう

まつりやめぞん。女のうちの仏神は。をのれまなん
なびきゐへるなどほとりぬとり。その日（祝言なり）ぞかなとと
いふは。此月（めれと詞）はされもてなりなどお中びとうことを
いひのぶる。（監）おりていくさもしまうとよまくほしうり
それば。やくひさしうさひめぐしして
（監）えまもし心ながけぐ松浦なるうぐこの神を
かけてちかん。（詞）この和歌も。けうまけまとうまと
なんさひ給ふと。うち思ふとうも。（地）よげうぞうぬく
しや。（めれとん）おれまもあるはべしすべくもおもちるど。
むすめどもまよますれど。（姫）まろはまして。もれもれ
ばしずとてぬれば。（めれとん）いくひさしきうり　おもひ

わづらひてうらみひけりまでは
辛（めれと）をへていの心のうらみあは焼の神を
つらしとやらんとわあうし出なを（盛円）まてや
これはいつはかばもしろしとゆくアもなまらりこそろ
けならひよ（めれとく）まびえそ（めれと）あとどいろまあく嫉ぬむ（地）すめ
うらいざはいへど心づらくわらひてごの人のとある
こそるまれし活をひきさぐ人侍らば（盛ノ）いりくせハ
れんをあは我ほげしもつきき人（めれと）のごこうけてこそて
ひがめ給ふあめりやとさ紀こそすといさりくとう（めれとノ云へ娘グ）（盛円）
あづまきそおうしこされらちつきされちあまづら
ね中びそりといふあるそ侍れくちあしこそそまハ

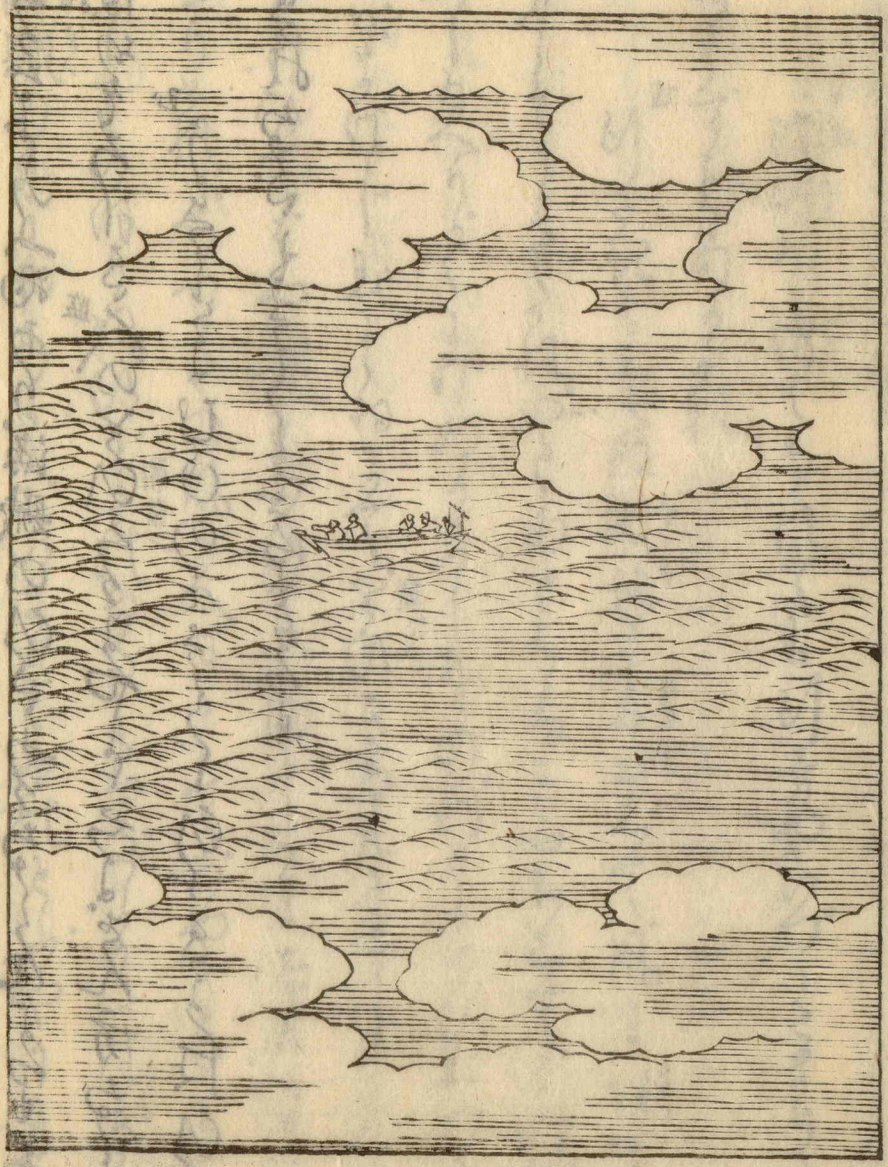
ちかくぞ敷の人とてもおろかなりつるあひだ、これ
ありて後、ある程しあれバりそとて、又ゆかんとせし
れども、らくへずやまさんいぬめり。法良がかくらひ
られけるも、いとおそろしく心うくぞ、この若殿の
すけどもしれず、いかばかりうまいるべうかんなる
らひおまうすべき人もなかりければ、くのちうらん。
このげんはおなじ心ある事とて中らびなりけれバ
ざんまあくまれてハいかさみ力ぞろきさんも家
きくあるんあうべき、ちからくあつめをやらんとせひ
ワづらひまされど、姫君の人をれどむかつくる
海のやどころがうしてそいなきくるしと ぞらひ

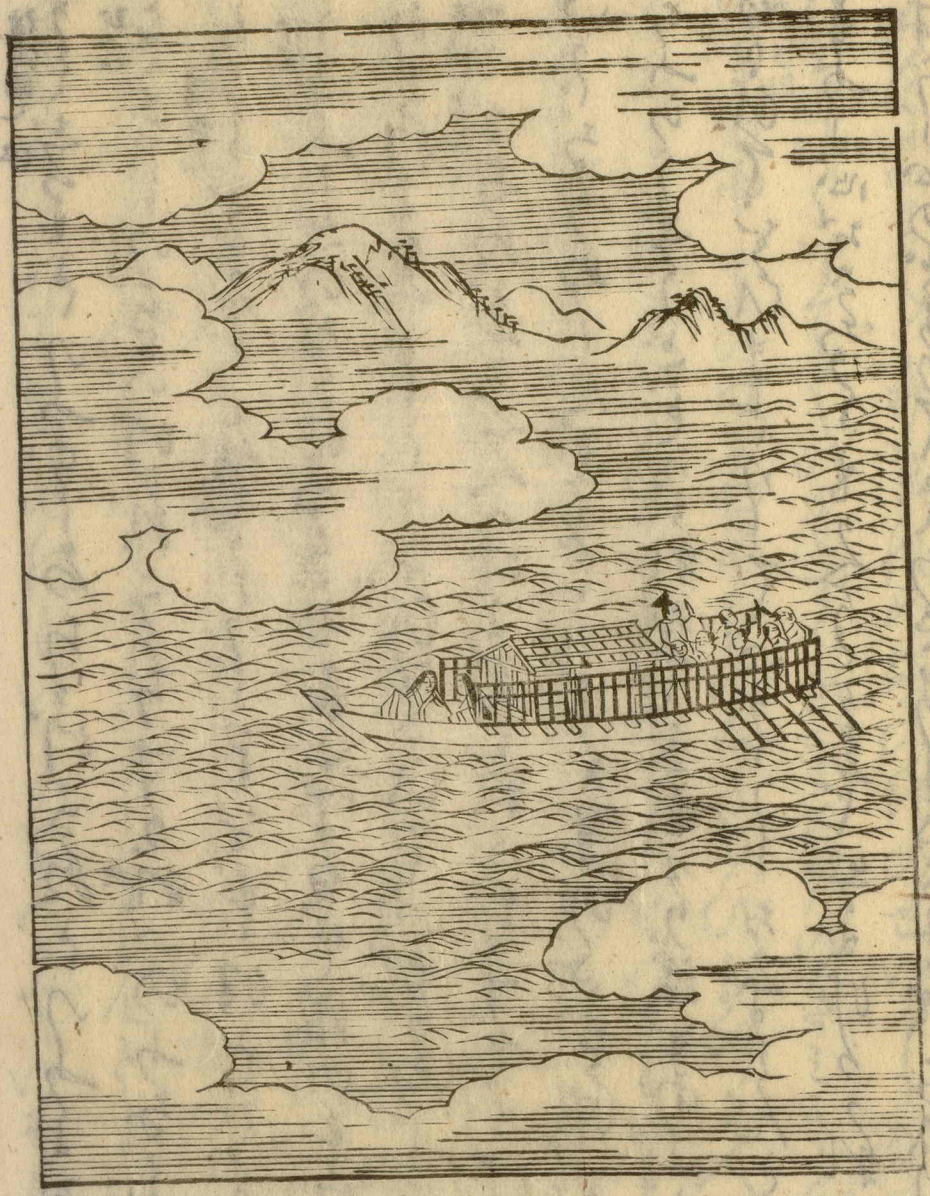
しげしゆへることなりとおぼゆれば、いとじきこと
をせひかまへていでたりけいまうとたちも、さしば
へぬうらうべをすてゝこのれともにいでたり。おて（お戎娘地）
ぎといひしは、今は兵ア の志といふぞ拙ひて、夢か
まげいでゝ舟にのりけり。大史の筮（ぜん）は、肥後（ひご）にかへり
いきて、四月の廿日の程に、ひ（日）どりてこんとすり
程にかくてまづ吹かり。おひ（お戎娘）おもとは、かいひろく
吹てえいでたらず。かたゝにつかれおしこて、おひ（兵ア志ん）
こんことのたきをせつに、さしへ行る事とて、
ことにこ揺がたきこともおしこゝ松浦の家の前（まえ）の
おぎさと、かれ婿（あね）れもとのつかをなん、かへりこをしれ

てうちしりけり
浮漂を濟されても行方やいづくとしらねど
あらずもあらされ
むねさだめぬ波路は舟出して風に任す
身をうきされば、おとあるこゝちぞうれば
かくへりくみけめぐりしをのぼりひまつく
へいけじまでしねつて、さゞひこえんとせしところも
まどひぞやみぞいのて、海にてはあんりまん人
ありされば、さかるの風さへすゝて、おやうきまで
ちしをのぼりぬ、ひぜんおおまおすずめ
海賊の舟まやおしん、ちいさき舟とやうやうまで

ラ土

くろなどいふ物あり海賊（かいぞく）のひとかつちなんよるとを。
皮（れ）おそろしき人（監）のをひくろまやとせよぞん方なし
（む）うきとまむ[illegible]のこさらぐひぐきよはひぐ
きれなるもさらしざるとなるも





（摂津國之地）
かれ志ゐ（地）とゝいふところちかげきぬといふまぞ。
（むかん）
とてこしいきいげれこうちすゝ。（地）れいのふなこど
も。（備前之）
かゝどまゐまゐ。かゝじゐをとほどもと
（永安）
うゝふゝ忍の。なさけなきも哀ま望也。（芝後）後のまけ
あれまなつしくうゝひすきひて。（芝後ん）いとゝなしき
（芝後ノ妻子之）
めこも志ぬとて。さんがげまぞこれうちすてゝげ。
いかゞなりぬらん。そかぐしく弟のことけと
さふらうどうどもハこれゐてきまゐり。我をあしと
ぬもひてをひまどりて。いかゞしなすらんとお
もふま。心おさなくもかへりこきぞ出まけゝれと
すこし心のどまりてぞ。あさましきことは我さひ何ぐ

ろうに心よきくすなれぬ胡の地のせいしをば
むなしくすてくりとずゝ家を等のきこえて
げにあやしのわざやさしげたるがひきける人の
こゝろにも俄にはかゞひてまげ出ましをいかにおもふ
らんとさ聞ぐせひけゞけゝ家かへるうるとてもさ
所といきつくべきふうさともなし世れる人といひ
よるべきされもしき人も見しずさゝひと所のれ
ゝめよりこゝろの逢月すゝなれけるせかいを
ちなれてうかへる波風にさゝよひてせひ見ぐらす
うるなしこの人をもいかましなしなしんとす家
ぞとあきれておぼゆれどいかゞはまんとていそぎ

入ぬ九条にむかしきれりけり人の御りうりかりを
とふらひいでゝ、まやどりをしめをきて、都のうちと
いへども、ちかぐしき人のすゝこりけるまも
あしぎ、おやしきいちめおきべのちかまて、いぶきく
世中をさひつゝ、秋にもなりもしまくにきしかる
ゆくさ紀かなしきことおほかり、老後のすけといふ
これもしべも、こゝ水鳥のくゞにまどへるこゝち
してづれぐになりしもぬ有夜の、こけぎちかきを
おもふにかへらんにもちしこちく心おさちくいで
こちにけりをおもふにしたがひきたりしもれ
だも、家いにふれてまげさり、もとのくにくかへ

ラ十四

ちりぬ。すゝけくべきやうもなきをぞ。ぬれとゝ。おとゝあけ
くれなげきいとおしがれば。ぢ。を詞。まうこれ男もいと
やすく侍り。人ひとりの此男にうへなりて。いづちも
いづちもまかりうをなんにとゞあるまじ。殘ぶい
こゝにさいきほひになりても。ぢ。ぢ。をさりもれく
なりにもぶらうしなりてはぢにごらうせましと
ゐるゝひなぐさめて。神仏こそはさるべきうるにも
ゑちびきなり給いめちうき程にやもるの文をゝ
はしこまても来り祈るまゝのひし。松浦籠湯おるじ
社やうれくにをもなれのふとてもおほくの乳とて
ゝのひき。今部にうへりてうくなんれしるしとえて

まとりのぼりたるとぞ。ちやく口ぬへとて。やたるま
まうでさきなる。そのまゝりしれる人なりいひたる
ねてごしとて。ちやくおやのうしひしだとこの。
のこれるをよびとりて。まうでさきなる。うちつぎて
れ。仏のれなるは。ちゝをなん。日の本のうちなりれ。
あらゝなるしあらいし給と。もろこしまぐる
をこしあんなる。ましてゆがみのうちにそとさき
ゝるのさかひとても。とし人のひつれが。ゆが君なば
ましてめぐをぬひてんとて。いぐしなる。ことさしま
うちよりとさぐめたり。おしたぬこうちなり。いと
ゆびしをくるしそれど。人のいふまゝにもおぼして

あゆみ給いかなりつゝみかさ身にて、うゑかゝりし
さすしふらん、けがかやよまなく成まへりとも我を
衰とおぼさば、おもすしん所にさそひまへ、もし世に
おはをぼ、此かれこをまへと、ほとけを念じつゝお
里そんに夜をぐにおぼしれば、地ぐにおやおりをまし
うばとぢ里のうちしさを、なげきけるを給
へるにかくさしあたりて、身のまりなきまくにとり
久しいとじくおぼしつゝ、うらうしてのぞいちと
いふ所に四日といふの時ぞりに、いけりてちも
をでいきつきまへり、おゆむともなくとかくのく
ろひこれどおしのうしうごうれぞまびしかれば、

まんりうなくてやすき給。このたのもしく人なりすけ。
ゆうやもちろう人ふたりさてもしもちる物。けしは
なぞ三四人。どんなだし。其限三人つれさうぞくし
て。ひとましめくもれ。ふりさげて女ふたりぞうとぞ
あり。いとうすりましのびたり。おほこあしのこと
なぞ。そくまてしくいへなどすりほどに日くれぬ。氣
あらじのほうし。人やぞしまとんとすり所より。
なるべの物しぬふぞ。おやしき女どもの。心にまか
をてとむつりを。めざ海しく男ほどに。げに人ぞ
をぬ。これもうちよりなりよろしき女ふたり。しも
べどもぞ。おとこ女うどしおほうあり。馬よりいりぬ

ひかきて、いとじくしのびやかしたれど、さうよげ
なる男だちともあり、ほうしもまめて、そくまやど
さ夜ほしくして、かしらかさありく、いとおしかれど、
又やどりかへんもさ夜あしく、まげうちしかれば、
人ぐにはたくまいり、和とまかしなどして、かうへも
かうつうこまよりぬ、せぞやうちなどひかさ夜ぞてく
おりしますこのくろ人もまづしげもなし、いとう
かひむそめて、かうこゝに心づかひしたるも、さ[illegible]
れ夷とそまこひちく、名をちりかり、とし月に
そへて、ちしうちきまじらひのつさちくちりも
もとおもひちやうて、この此てしまちんこびく

まうでけつれいあるにひまなければ。かやさくかまへ
さうなれど。からうあもこへがらくそでによりて
ころは。心ざし深の心げ。ともありのもどきやうのもとる
よりこそ。まうしあるべし。ぞかしさてづゝとより
で。これにまへに、まうしをの人へれば、いかにもうちあはで。
わきもちいひても。といふなきく。は。いかが
この人には、あやしげにて。ものゝちがひより
のぞけば。このおもひのかずし心ちぞ消えとはえ
おはずや。つかうまつりしはし。めぐりくる
こそやつれにければ。おもひくのぞしへるめるへ。めぐ
にもこはいつたり。三条にてありめすとよび

ラ十七

よすり女をこれはまゝこし人なり故れ(夕ゞ)ゝに志も
べなれど、ひさしくつうまつりなれて、かれゝられ
ゆへりしれ(お家ノ家)をこゝろまで、おつとしもなりなりと
そなして、いうじく夏のやうなり、しうとおぼしき
人(ゑ)はいとゆかしなれど、こゆべくもりまへぞ、しひ
まびて、この女(三条)をとらん、兵(老後好かれとの名に)とうぐといひし人も、
これをこそおしめ、姫(ゑ)のおもしすりまやとおもひ
よりまいと心もとなくて、此なりへぐそなり三条を
よぞすれど、うひ物に心入てどもんにもこゝ、いとよく
しとおぼゆるもうちつけなりや、(三条)かしうしてこそ、
おぼしずこそ侍れ、つくしのおまはたるゝとをぞりへ

まゝかげ寺の身をしらせぬふべき家人よ。人こゝへ
まや侍らんとてよりまゝかり。お中(なをん)びかりかいねりよ
まゝぬなどさて。いといたうふとりまゝり。我ゝおもひも
いとゞおぼしてまづしかれど。お(羽)我さしのぞけ。
我をがこまりたりやとて。(なを)俗をさし出たり。この女
てをうちて。(羽)おゝおもとよこそおもしましかれ
あれうれしともうれし。いづくより来りぬひたり
ぞ。(ロ分)うへハおりしますやと。いとおどろくしくなく。
(なをん)ワらきもれまてこれまし世をしひいげよ。へゞそ
まよけり年月かぞへられて。いとあはれなり。(羽)まづ
(めれと)おとゞハおもすや。ワら君ハいかゞなり給ましおそ

ぎと覚しいとて、君(タガ)のれことなぎはりちゃさ世
をおもつる。あへちくもやいもんとて、かけんもゆ
ゆしくていひ出ぎ。これ(三条河)おりします。姫(玉)君もおとれ
ま成ておもします。まづおとぐ(のれと)ありくちんと
こそえんとて入ぬ。これ(玉人)おどろきて、(討)爰のうち
もすりかれ。いくつしくいもんかさちくおもひきと
ゆり人ま。さひめくしぬべきことよとて。此へぐそ
二まよりきたり。けどをくへぐそつかびやうぶぐけ
もれ。名所ちくなしわけて。まづいひやるべきかる
ちくちきかもす。おいぐ(のれと)もさぐ(討)ワ(タガ)君はいりぐ成給
まし。うちのとしごろ。爰にてもおりしまさん取を

えんとぞ乾をさつれどもうかゝる世界(せかい)まで風の
をとまてもえさくつゝへさてまつらぬをいふじく
かるしとせつゝおいの身の物りうぐまりうろも
いと心うかれどうちすてなりゆへるつゝ君(むし)のらう
さく衣までおりしますふこちのほだしまもて
ワづらひ罪てなんおぶ毎さ侍らといひけど
かれば芳(たをむ)そのおりいつかひなりしことよりも
いへんかゝなくいづらちしとおもへどもいでや
罪てもかひなしけれ(夕符)かゝいもやうゝを給ふこと
いふまゝに三人(乳母 兵ア去 三条)なるゝむをかへりいとむつかしく
をさうもうるし

日（ひノ人ご）くれぬといそぎたちて、こゝあしのことゞも
しらく先いでゝいそがせば、中（めれと）くいとこころあハ
こゝしくてこちりけれ、もろ（左を詞）ともてりやと
いへど、うたゝゝ（めれと）ともの人のあやしとしべかれば、
すけ（老法）まもことのさ夜ごまいひしらをあへど、我も
人もことまたづしくはあらで、これありこちぬ。
右をハ、ひと（左を心）しれずめとゞめてこゝろ、ちゝるまう（ひノ子）
くしげちゝうしろでのいといたうやつれて、うつ
ぎのひとへめくもれきこめゐへるかこのしきかげ
いとあたらしくめでたくこも、心ぐるしうゝるしと
こゝろ、すこし（地左を子）あしなれこゝろひとハ、とくこゝろうて

つきまゐり。この君をもてはづしひきつえつゝ。そや
をこなしつゝ。どまぞのぼりぬへる。いとさはがしく人
まうてこゝてのゝしる。右をが局は。仏の右のうへに
ちかきまゝしたり。この御所は。まぶしかくら。ぞまや。
よしのまゝと。紙かりけるを。れこゝにおりしまをと。
君かもしていひこれば。おとこどもをぞとゞめて。
すけまかうくといひあはせて。こゝにまうつし
なり。かくあやしき身なれど。さゞ今の大殿にあん
さふらひ侍れば。かくかすかなる所にてもらうがは
しきことは侍らじとこれを侍る。お中びたる人をば。
かやうの所にはよろしぬなま袖どものあなげしは

志うすりもかうじけるまことありとて。抽鉄いと
をまほしけれど。おどろく志きをこなひのまぎれ
よさはがしさまもよほされて。仏(ぶきん)おがみなり。右をハ
心のうちよこの人(正)をいつでうぞ。えしえんとは
うりつるよかひぐうくてゝなれが。いまはらひ志
ごと。おとゞ(源)の志のうぞ。なんの心ざしふく
めるよ。志しをなりて。さいそいあしをなりぬへなど
申けり。ゆまぐ(地)よりお中べおほくまうでうりけり。
此志のうその小方もまうでうりけり。いろめしく
いさほひぬるをうしやうて。この三条がいふやう。大(三条詞)
ひ志やよへ。とくゝ申さじ。あが妹(正)志。大紙の小方

なしずハこうづくの交(ずやう)紙の当ようなしなれん。三条らもず
いぶひまさへて。ゆりやハつうまつんと。ひさいよくをあ
てて念じへてをり。右をいとゆゑしくもいふかれと思ひて。
いとゝ(おとゝ詞)いうくしそゐ中びまされか。中(以)拘どのハ芳のれ芳し
ごまいかゞおりしまさ。まして今ハ天下(あめれたこ)をれ心まかけ給
へる大臣(おとゞ)まていかゞらりいつしきれなりまれ(む)ゝさも交
紙のめまて。されさゞまりておりしまさんよくいへど。
あれ(三条詞)りまゐへ。大臣ゝちもさゞしまて。大弐のこゝちのう(大弐ノ事)
への志あのこゝちの祝世(筑前國)音寺ま。氣りゐひしいさほひ
ハこゝろどのこゝもきまやハをとれり。あれむくつけやと
ておをさしまてをひきたるなず。おゞこへてをり

けらしべ(じ)は三日こもらんと心ざしの人り。なきはさしも
おもてざりなれど。(右を詞)うらつゐでは。のぐりは望えんとて
こもるべきよし。大徳(とこ)よびていふ。(地)れ(乳文を)ありしぶこなど
りきたる心ぢへなど。さやう(大徳を云ふ)の人はくぐくしう
ひきまへなれば。つゐ(右を)のことにて。れ(詞)いのふぢりの
(おりかきれ名を)御つゐ君といふが。れたるはなり。よくいのりゆる人。
人は代なんこなりいでたる。その(ぐん)れもちたしなり
べしといふをきくも哀なり。ほうし(大徳詞)いとりしこそ
ことなれ。ふるまなくいのりゆ侍りしまこそ
侍れといふ。(地)いとさけがしう夜ひとよをてなふなり。
あけぬれば志れる大徳の傍(ぢう)はおりぬ。(おもしろ)抽代こゝろ

やすくとなるべし。姫(む)君のいとくやつれ多人なれ
づしげにおぼしたるさ夜。いとめでたくこゝ也。覚(たゝ同)
えぬたるきまじらひをして。おほくの人をなん
こゝあつむれど。とのゝうへ(紫)のれかたちにくらぶ人おハ
さじとなん。さしばこゝなるを。まゝおひ出給姫(ゆゑ)君の
れさ夜。いとことなりにめでたくおもしまさかし
づきなり給さ夜も。おほらびなるめるに。かう(むり)やつれ
ぬへるさ夜の。をとり給まじくこゝし給ハ。ありがたう
なん。おとゞの君。ちゝこゝかどのれ時よりも。そこらの
やれ君。それよりしもハのこりなく。こゝなりあつ先
ぬへるれめにも。たうぶのの君(あつぶ)君とさてしと。此

姫君のれうちと紙なんよき人とハこれをいふ
やあらんとおぼゆるとぞ給ふ事なるべしかれ
君の家をバしりきてしず ひめぎみハきよらに
おりしませど まぐらくなりて おいさきぞをし
きりを給ふ へのれうちハなほこれなるしび給ひん
となんこゝふ 食もすぐれしりとおぼしたるを
ことに出てハなまかはかぞへのうちにハ聞え給ひん
我にあらびゆへるこそ きこえハおぼけなれとなん
こもふれきてし給ふ 今のぶりハ有意どもを
又さりこぶひおりしましなんやとなんそひ給ふを
いづくをとり給ひん 抱ハ限ある抱なれバ とぐれ

ゆへりとて、いたゞきをもたれたるひかりやもおは
する。たゞこれを、すぐられたりとハきこゆべきなめり
りしと、うちゑうてこなれば、おいべもうれしとさふ
かりれさ海を、ほどくあやしき所に、しづめなり
ぬべかりしに、あたらしくなしうて、家のまどをも
拵おとこをんなれこれむべき子どもにもひき別て
なん。かへりて、しらぬよれ心ちする家にまうでこし。
あがおもと、しやよきさ海にこちびきくこくたまへ。
たるきこやづくしたまふ人ハなれげからゆき
まじまたるたりもれしゆふん。ちくおとゞ
こそしめされ、かずまへられゆべき。たゞかりおぼし。

りまへよといふ。むづ（むじ）しうおぼいて。うしろむき
ゐへり。いでや（左を詞）身こそ数ならぬ。（源）愛もおまへちりぬし
つるきゐへば。もれくありごとは。いりりちらせ
ゐひまけんと思ひいづるを。（源）ちらしめしをきて。まれ
いかでこゝにきこえんとしつゝを。さて出ありこら
ぞしらん。の給はすらといへば。おとゞの（めれと詞）（源）君もめで
たくおりしますとも。さうやんごとなきれめども
おりしますなり。まづまことのおやとおはせれ
おとゞまをしらせなりゐへなどいふに。（左を詞）おりしさ（夕ぼ人ヲ）夜
ちかうりいでく。（源）よのまれがてくかなしきことは
なんおぼしてかれれりまりまきなん。子もすく

あきかさうぐしきさま。つがこ後こづ出たると。人
まはしきてとそのこゝろのあふなり。こゝろ恵
おさなりけることはよろづはまれつゝましかり
し程まで。元昌もこさえで色しきほどは。お気は
改めへるよしは。此ちまてしりまさ。まりやしは。
（お気ノ）
（係）とのは余りあひし日。ほのこなりしが。元宗のでや
やこまさ。さりとも姫（お）君をばかれありしかがの
女系はとゞめぬへくんとぞしひしおれいこじや。
ゐちかゞへまでおりしまさじよちどうちかたひ
つ日ひとひむかし姫（銀意へ）ばんどちどしつゝ。余り
（銀意へ）
つゞふ人の有さ風どもこそさるゝかたなり。まん

より川水をば初瀬川といふありけり。右近
ふるもとの枝のうちどを為ゆぞはふる川のべ
きゝをとゝましやかれしさせまもとゝきゝ也
むたゞ川を川をやふれことはしられどもしふ志
あふせ瀬に別さへなかれぬどうちなさてかはすさ面
いとめやましかうちはいとかくめでたくきよげ
なるゝおなりびこちくしうおはせましかば
いかに むのさぞなるまし。いであれいかでかく
おひ出給へんとおとゞをうれしくこふ。ぞくぞ思ひ
こゞいとけりやかまおほとうまてやもしくとぞ
こをやぎゐへりし。これはそこかもてなしなど。

ちづしげまよしめきゆへり。けうしを心ありて
しひなすまゝ。これしし人はさとびまゝりを心えがたく
なん。ぐれば（地）堂（ゞ）にのぼりて。まゝの日もまゝなひ
くらし給。秋風（あきかぜ）谷（さま）よりちろかまゝのぼりて。いと
しろさむきゝ。抱いと気なる心どもにはよろしけしひ
つゞけられて。人なきくちゝんことも。ありがたさ
ことくしひしづこつゝを。此人の抱がたりのけいでに。
おとゞの此ありさ海。ちらゞのちまともあまじさ
此子どもこれ抱めしこそ給をさけば。かゝるかしる
くさこれましくぞ。そしなりめる。いづとてもかゝる
こゝにやどる一所もとひかたしてまし又をひまどりし

さんときと。おやうくせひかり。右をが亂は。六条院
ちかきつかりなりかれが。程(むり)とをうしでいひかきても
ころぎいでまぬなこちしけり。右をは大夫(ほ)より
まりぬ。このことをかすめさしゆるついでもやとて。
いそぐ故かり。とかどひきいるゝより。けもひことま
ひろぐとして。まうで来しする車おほくまよふ。かぎ
なしで立出るも。まばゆきこちする。玉の基(そな)なり。
そ(左)の夜は此(ほう)まへまも来しでせひふしたり。まこの
日よべさとより来れる。ぶらりつゝへどものなりは。
とり(ほ)つきて右をめしいづれが。おまたしくおぼゆ。
おとぐも此しんじて。おどかさとゐは久しくさ

つる。れいなしぎやもめ人のひきこぶ人ゐ海がくるや
うもありし。おりしきことなどありつらんなど。
れいのむつりしうこもふれごとなどのゆふ。まか（右を訂）
でゝなぬうますぎもべりぬれど。おりしきことは絶
がくなん。山ぶしゐりて。おもれなる人をなん
ゑまりつけたりし。なまべぞとうひゆふ。ふと（右をん）ゆ
いでんも。まづうへ（雲）まきをまして。とるゆきア
さんを。のちまさ給てはべぞてきてけれと
やおぼさんなど。もひこぶれて。今きてしさを給らん
とて。人ゞ来れば。ゆゑさしつ。おほ（地）とれぶらなど
来りて。うちとけなしびおりします。はありさ海ぞ。

いとふかひ御ほうり。女(宏)君は廿七八にあるりおひ
らんかし。さうりにさうしにねびまさりおへ。
すこし程へてこなりは。又この程にこそにほひく
もふまおひにそれとこそ給。(たをん)れ人(む)をいとめでこし。
をこしじとこなりしかど。ちひなしにや。おをこそに
なきに。さいそいのなきとありとはべぞてあるべきわざ
かれと。こあもきらる。御(源ノ)ほとのごもりとて。右をを
あしまりにめす。(河)ひさ人はふうしとてむかうり
めり。れこしへあるどちこそ。心りそしてむつひよ
りかれとのおへば。人ぐ志のびてけしふ。さりや。(女ぞうども河)
これかそのつひなしひこまもんをがむつかん。

うつさせたまふれどといひかうりなを。ひげしは
しさるなどいひあへり。うへも（源行）（雲）年人ぬるどちす
とけすぎがたるむつり給ちんとや。さる（雲行）まじき
心とこ〇が。あやうしなど。右をはうらひて。ひ
給。いと（地）あいぎやうつきありしきけさへそひ。ぬへり。
いまは（源ノ）ぬほやけにけへ。いそがしきれあるさ海
まもあしぬれ身まて。世中のどやうなほ。さうく
まくに。こゝにもうるきれたまふれどとをのこまひ。
おかしく人の心をこゝなふあまりに。うるふる人を
さへぞたまふれ給。かれ（源行）ぞ〇いでこりゐんや。ちま
ぎ海の人ぞ。こうときすぎやうざうらひて。おて

まうかとさひ夢へぞ。あれ（左注）こぐらしや。もうなく
きし給ひし。夕がほの露のれゆかるをなん。見
夢へつけたりしときも。げる（添詞）哀なりけるとかれ。
さしごろはいづくまうとの夢へが。あり（左注）のまくまは
きてしまくて。おや（詞）きさ山ざとまなん。むかしべも
かたへはかもしで給りかれば。その世の地絶し出
給りて。こへがたくとふ夢へりしなどきてしなり。
よし（添詞）心きり給ひぬれあたりまとかくしきて
夢へがうへ（雲）あれまづらりし。ねふたきま。きていふ
べくもあしぬ地をとて。此袖きてれきてふたぎ給つ。
うたち（添詞）などはかれむかしの夕奥（付）とをさらじやなど

のなへぞ。なほ訂 ゐるしぞさしもいつぞかれし給はんと
せひなひしを。こまゐるうこそおひまさりてこえ
なひしかと罪ゆれば。なほ訂 おかしのことや。これだかり
とかおぼゆ。この君 生 とのなへば。なほ訂 いつぞかさまでもと
きこゆれば。なほ訂 きたりがおまこそせつべそれ。我まく
こうしがもうもろやもしかしとおやめきてのなふ。
かくきこそめてのちはめ。なほ とゐちつく。なほ訂 さしがれ
人 ひ このまたりまつらひなとん。どしごろ物のついで
ごとよ。くちおしうまどりしつることは。おもひ出
つるまいとうれしく罪いでゐがし。いまいでおぼ
つかなさもかひなきことまゐん。ちくおとぐよは

あがるりきこれん。いとおまるもてきはがるめれが
ぜなしぞいまもじめこちまじるもこんが。なり
なりなることこそあしめ。我はさうぐしきる。
おぼしぬ所よりこぞ。いぐしこうともいもんし。
すきまれどもの心つくさすらさきひきて。いと
いこうもてなさんなどかこひこまへぞ。かぬ（左ぎん）ぐ
いとうれしくきひつ。こぐれこうろまなん。おとぐま（訂）
きしきまこんとも。これかはつこへほのめし給
もん。いこづらますぐ（夕ぎ）和しこまひしかもりまは。
ともかくもひきこすけさを給もんことこそは。ぬ
りまを給はめと四月。いこうもかこちなすかなと（添訂）

ほくゑこゝながし。なまぐさぐこゝなへり。おまれまもられ
かりけり。契となん。さしばさひ。ひろう。うくて。川どへ
ふるうさぐの中に。かれ（タ[illegible]）おりの心ざしがり。さひ
とじむ人なりしを。いのちながくて。ワがうる
ながさをも。こ侍るさぐひ。おほかめるなりし。いふ
がひなくて。なをどうりをうこゝまゝろは。口おしく
なん。さひまするに時なきに。さてもれし給ひ。
いとこそほいうなふ心ちすべかれとて。此をうそこ
なり給。（比）かれ東つむ菓のいふかひなるもしを。
おぼしいづれば。さやうにさぶらておひ出ふらん。
ひとのありさ面うさろめるとて。まづふこのかしさ

ゆかしうおぼさるゝなりなり。もれまめやかに。おり
べかしくうきぬて。もしまかく（久行）ゆかを
しらずとも聞てしらんこしまにはおふる
こゝろのすぢいふえしをとゝなんありけり。れふこ
こづゝまかでし。のぬふさ面などきこしも。れさう
ぞく。へごのれうなどさ面ぐ（あり）（窓）うへ（地）にもかうらひ
きこしぬへるなるべし。こゝろしげどのなどにも。まう
けのもれめしあつめていろあひしさ面などことゝ
なるをとゝえしをぬへれば。ぬなるびこゝろめどもこゝは。
ましてめづらしきまでなんぬひけり。さうしじこゝハ
さごかごとぞうりにても。面ことのおやのれけらひ

あゝるがそうれしかりしめいりでかなしきぬ人あはれ
あさりては、まじらもんとともむけて、くるしげな
あばしされども、おなべ、ようき海を、肉をアカしあらそ。
人ごも、とのげりしさそ人がらのひちば、あうぎの
糸もうぞのこさうて結ゐん、かやこの此婆いらゑて
やまぬ物や、肉をがめずまも持しずいぞかれしん
どつけられん、せふあ人しげる仏神の此ゑも、
のきれしがり、そりや、ましてられもくらいしりは
おりしまさぞらく、これ字え、ちずさむ、まづれ此逸とし
とめてかくもはあか、いとこよあぐ、ねちあべきうしん物
きとくがし、くおばいらうが、のこのいとかり

ぢしきとりいでくゝうきなり
むかぞなるぬこゝりやなるのまぢなれがうさ
ましもかくねなどとぐめけんとのこゝのなりてい
ふれどちてよろぼりしれどあてうてくら
ありしかるのが此心ありねまるまずこゝぬべきれる
ばしんずりまこれこのまちまはいこげらなり
こいどもなどもなしいさほひことまずこみちぬ人
れがげきうま人しげくもあるべし中宮のかり
ますまちはかやうのひともすこぬべくのどやう
なれどさてさふふ人のつくもやさてなさんと
そして すこしむもれこれどうしさらのまちの

西のさいふぞれまてあるをことかゝ人うけしてと
おぼせ。あひずこも悪びやうま心よくもれし給
れかゝなれば。うちかゝしひてもありなんとおぼし
をさろう。[塗]へまも今ぞかれをしむ[夕顔]しのよの絶説
罪しいでぬふげうかく[塗詞]れ心ゆりこめ給ことあり
けりをうしこ罪をぬふ。[添詞]まりあるしやよまを人のうへ
とてやとゝまずがたりは罪を出む。かゝりついでゆ
へぶてぬこそ。人まはことまおもひこそ出れとて。
いと哀げにおぼし出たり。ひとれうへまてもあまた
こしまいとしたるぬ中も女といふもの心ゆるさ成
あまたこそしかば。さしますきぐしきに心

ハけうもじとなんせひしをなのづしかまじき
をもおまえこしなるまおもれとひさふるこらう
こさうこハまこ(タグ付ノ事)ぬぐひなくなんせひせらく。よる
あしましけば。小のまちる地すゝ人のなこまは。
ちどうこぎらまし。人の有さ面さりぐこなんあり
けうかどく(タグ付ノ)しきう。あしきすぢなどハをれたり
しかども。あてもうるらうこくもありしれ
ちどのぬふ(紫同)さりともあしのなこまはこちなんぐ
給ハぎらましとのぬふ(地)をきこのおとぐ(明石)をがめざ
ましと心重ぬへり。娘(明石ノ)君のいとうつくしげりて。
なる心もなく男給がらうこけれバ(紫心)まこことそりぞ

うしとぬぼし人さうかくいふハ九月のことなる
なり。ひたり始たんこと。すかくしくもいでたは
あらん。よろしきひらもひ人などもとめさ須。け
らしまてハうちかしかぬ人にも。京よりちりぼひ
きたるなどを。さうりにつけてよびあつめなどして
さふらハをしも。縁(ユハイ)ままどひ出給しさはぎる。これ
をくらかしてがれば。又人もなし。京もなのけから
ひろきところなれバいちめなどやうの和。いとよく
もとめつゐてく。その人のれ子などくハしらを
ざりなり。右をがちとのめ条し。まづ遣びてけさし
なりて。人ぞえりとくの人。さうぞくとくの人など

志て、十月まで、つゝり給、(源)おとゞひんがしの(花ちり)れかるゝ
きゝて、なりぬふ、(源詞)哀とせひし人のもれうくして、
はるゝさ山里よりこれぬるけりを、おさるゝ人のあり
しがらしにも人志れずこゞ○ゆりしかぞ、えこさて
いでゞなん、女よりまで、過るけりを、おぼしぬかる
よりなん、さてつけるとさてこゞるとて、うけろ
えし、ゆりなり、たゞもなく、女よりり、(夕)中将を、罪しつけ
こゝる、おしくやハある、おなじごとうしろこぬ人、
山がけめさておひいでこれば、ひなびこゝことおほ
かんさるべくことゝふれてとしへこまへといと
こまやかにきこえて給、(花ちり詞)けるかゝる人のおりしけるを、

しりさてしざりけりよ。ひめぎのひとところもれし
ぬふがさうぐしきまゝよさことゝかれとおひとゝる
のぬふ。波（源詞）おやなりし人（夕詞）は心なんありがたきまで
よりし。れ心（荒ちり）もうしろやすくおもひこそあれど
などのぬふ。川（荒ちり詞）さぐしきうしろこむ人などもこと
おほかしでつれぐまゝなりをこれしかなべき
ことなんとのぬふ。とのうちの人は。れむ（むと）を先に
しでなる（人詞）べを又君も出ぬへるなるんむつしき
かりもれあ川かひかれといひかるも。れ車（ぶ）三ばかり
して人のすがるどもなど。なをあれば。ねなりびず
しきそさりとれ（源）よりぞおやなるかれとなりぬへる。

その和やがて、源おとゞのきこゝにつかりなり、むかし
ひかりがんしなどいふなは、きくにつかはなるし
など、年ごろのうねくしさまさしもしひ、こゝそ
ざりけるを、ほのかなるおほとれがしかり、尺牛帳志
ほころびよりさくらまこなるいとどおそろしく
さへぞおぼゆるや、源ノ つかるを給ふくのとを、右をかい
さろそ、源討 このとぐちかりいるべき人ハ心ことなり
こそとうちつかひなて、ひさしなるおましまつね
ねなひて、出こそいとけさうびたる心ちもれ、おやの
かれハ、家しきさもれとこそさけ、さもおぼさぬかとて、
本帳すそしをしやるを給、ひかりなくまづしきれば

そだておかすやうぶんなど、いとめやすくこゆれ、ハう
れしくて、今はうし光こきんや、おまり心こそしと乃
ぬへば、なをうるげて、はうしよす。おまれの人やとすうし
ひしぬふげるとおぼゆれまゝのちづしげさなり。
いさゝうもこと人とんぐてあるさ夜にものなひお
さずいうじくおやめさて、年ばれ引来もしらで。
心にかけぬひまなくなげき給をうでこなるる
つけても夏の心ちして、ふしくるのことぐもとり
そへしのびがたきに、えなんとてられざりなる
そ、ばめとしのぐひ給

まことなりかなしうおぼしいでらる。れ(源)としの
ほどかぞへなて。なや(河)これなれ。かくとしへたる
女ぐひあらじもの。浅ちぎりけしくもありける
かれ。今ハもれうねくしくつりびなべきれほど
まもあらじをとしどろのれ物語などもこそて
まほしきまおぼかおぼつかなくもとうらこ語ま
きこえんこともおくもづしかれば。何(河)しくず志
づこそめ侍まけるのちおまごともあるかおきかな
なんとほのかまきて語こ思ぞ。芳(源ん)べ(夕方)まいとよく
おぼしてつりびこりける。ほく(源ノ)思うて。志(河)げこ女人事
けるとおもれとも今ハ又これかはとて心ぞへいる

かひなくはあらぬ所いへとおぼせ、なをまあり
べきことの給はせて、(源)けらなぬ、(ん)めやすくもれし
ぬふをうれしく思して、(法)うへまもかたりきこえ給
(河)さる山がけのなるまとしへされば、いかまいとおしげ
なるんとあれづりしを、かへりてこころとづしき
までなんこゆる、かゝる抱ありといふで人まもら
きて、(重)兵衛の文などのこのまがれのうちこのまし
う思ぬふ心こゝぐりましがれ、すき抱どもれ、いとうる
たしぶちてのこ、このまうりまこゆれも、かゝる
もれくさきひのなき程なり、いたうまてなしたし
がれ、なをうちあらぬ人のうしきこゝあつめんとの

なへば、おやしの人のおやく、まづ人の心をげまさん
こと紙おぼしてよ、そしりしぞとのうまふ、まことに
ほ[塗]ことをとそ、いまの心ならましかば、さやうに
もてなしてこのべかりけれ、いとむしんにしれし
てしつぎぞかしとて、つしひなつる、おもてあらそて
おもしすかいとつくおしげなり、すぐ[illegible]引よを
なひて、もなしひに

[illegible]

[illegible]ハそれなれどむかづらいかなる
すぢを易さうらん、表とやがてひとりごちなへば、
げ[塗]につくしけり人の名ぶなりとこそまふ、
[illegible]の表にもかゝる人をこゝ[illegible]出たるをよりい

してじつひとふしへとのゐひかれば、ゆるゝまゐ
でゐひて、人(訶)かぞなしずとも、かゝるまれさふしふと、
まづめしよすべくなん侍なる、此(ヨ)ゆゑりの御ぞまも、
まいりつゝうまつしざりけるゝとく、いとまゐく
しうきこしゐへば、なほいたきまゝで心しれる
人はしふ心(ヨム)のかぎり河(流れしてく象と云へ)くしくりし此すまゐなる
しかど、おさましうゐなるべくりしも、ことしへ
なくぞしひくしべしくや、此(地)しつしひよりもじめ、
い面めしうけるゝくて、おやゆ(ヲ)りしかぞとじつび
きこし給此さ面ゝちよりもじめ、先もおやまおぼ
ゆるゝ、今ぞ三条も、大弐とあれづゝりしくしひなる、

まして げんじのつかへしけるひと出るもゆくゆくさき
く限なしふぢのすけの心づくへとかりくさしもれ
は君もなしとりなとも思ひすまへぬぞうかりし
こともまこちめべしとぞしるしてのなけしとも
さぶめまんべきこしだまさにそれのふぢのすけは
ありぬべしばみなさびしげにさうし心もちなくは
えゆあすくいでかりまても立出らんべきよすが
あるおぼしし物とのうちとおきむは出へ
ありし人をもたづねてまさちすがとなれは
いましきめなばくとせ給けるにちとせのこころの
心すらくそのこまりるありがたくおもてしまする

いとかうじけるし、年のくれは[illegible]しいとひのこ
と、人ぐのさうぞくなどやんごとなきれつゝは
あばし[源]とさてこりかうり[ん]ゝ[ね]ちるびこうことやと、
山がいのるゝはあれづりとしくらゝとさてゐて、
てうじこうもてまつり給いいでゝなりもれ
どもの、けれもくとそをいくしてをりいくもて
まいれるほそながこうちさの色々さ面ぐなりを
[源]れんずりは[河]いとあはりけりもれどもれ、ゐる
がるりうしやゝなくこそもれすべりそれと、
[法]うへはさそしのへバ[法]こくしげとのはいかうまい
れるもゝるゝはきさせのへるもゝれとうでさを

まへりうろすぢをとぞすぐれてよろちなさいろ
あひ。よ浪ひを深つけあへば。おりがたしとの思
語。さうして。のうちどれ。よりまつしきうち地ぞ。
ゆへんじうべてぞ。さきありさいあぢ。さ御ぐな
えうしを語て流そびけ。ころもぞとへどまよひれさを
みそおとちびうろぢうみずさゆへてぞれハされ
いとどうがつてうつ。らへもさてまひていづれ
ぞさりゆきさうけぢめもうえぬ物どもちあうなさ語
あれ人のれさちる。さひよるへ河てまれあへし。
難き物の人のさ御にまぬきび。ぐしちもあり
あしとの語へば。おもぐうちつひてづれちなくて。

人のうちをしもうらんの御心ありなかさて
いづれをとりおぼすときこしめへば（紫詞）それもうぐこ
まてはいかでかとさすがにもぢしひておかす。こう
ぐいのいとまんうきこうえび染（そめ）の御こうちき。いま
やう多のいとすぐれこうとは。これ御れ（紫）れうさくら乃
はそちがに。いやくかなりかいねりとりそへては。姫（ゆゑ）
君の御れうちなり。あさもちなぐのかいふのをりは。
をりざ海ち海めきこれど。匂ひやかなしぬに。いと
こうさかねりぐしておうつの御（花ちる）かさに。くもりなく
あかきに。やまぶきの花の御そちなかは。皮西の墓（むかつ）に
生れぬをうへ（紫ん）はこゝめやうまて。見しあはす。うちの

おとゞのもちやうは、おなさまよげといふえちがら。
ちまめしうしてうつくのまじらぬに、ふる事
ちゆりと、げまをしちりしりくを、夏はいぶし治
ゆ〇ど、夏はこやつまゐへるは、こゞちよしず、いでこの
うちのよそへは、人もしごちぬべきとちり、よ
しとても地の色は限あり、人のうちはをくれたる
も、又れそこゐあり地をとて、坡東摘芸の出れうに、
やちぎのをりもれて、よしあるかし事をうぶれ
をれりも、いとちまめきこれば、人もれずほくあま
れ治、梅のおり枝てふとりとびちがひ、かしめいたる
もろきこうちきは、こきがいやくちりかきねて、

あるしのれうにはそひやすけにうきをうへ(塗ム)ハ然るき
まくとこゝろ元 蜂の花ぶにおをまびのをり抱いと
心ぢをあるをこうけなて、れれうにあるくちなしの
れぞゆるし色あるそへなひて、おちなじ日を給べき
れさうぞくさてめぐらし給げにはげ川いたる
どもこんのれ心ありなり、これれかへすどもたぐ
ならず、れ(添ノ)つるひのろくうろぐなるに、末摘茶東(ひんぎ)
院におもすれば、いますうしさしをなれ、えんなる
べき紙、うりしくもれし給人にて、あるべきことハ
たがへ給ひず、やまぶきのうちきれ、袖ぐちいたく
すくけたるを、うりほにてうちかけなへすれ、ふみ

まは、いとかうだしきこうちのくまがこのむくこし
としへあつきが、きぶくこころは、いでや（みゆ）こまへ弱え
おかくまとそ
きて（まつむ）これがうしこられかりから衣かへしやる
てん袖をぬらして、れてのすぢことはあふよりは
たり、いと（ほノ）いたく用く思ひぬて、どこまもけをきゝ給い
ねが、うへ（紫ん）なるごとなるんとこをうをこまへり、れ（ほノ）
つひはかづけ（まつむ）ころ袖をいとまびしくかるもら
いたしとおぼして、れ気色あしかれば、すべ（後）る
まかでぬ、いたじくをのくは、ぬくめきつしひかり、
かやうは（ほん）ひりなうつかめしう、かたもらいたき

所のつきたまへる。さうしまもてつづひぬべく
おぼして。地もづりしき海にあり。ぞ詞いの方よりんは。かし
ころも。夜もとぬるくかどとこそもあれ。まろも
そのつらぞかし。さしまひとすぢにまつはれて。いま
めきたる云の葉に。ゆるぎ給ちぬこそねたきことは
又あれ。人のあるあることを。おりふしおまへなどの。
ひざとある方よりのあるまでは。まとゐもあれぬ。
まじぞかし。芳のけさうのおりしきいどこまは。あぐ
べといふいつもじをやすめどころにうちをさて。
云の葉のつぐきたるあるこちすべかめりなど
ひしひぬふ。よろげのさしし奇まろしよくあない

しりミ河くして、そのうちの云葉をとり出るまゝ、
つきころすぢこそはつゝようはかちしざるべかれ、ひ
（未つむノ文）
こちのこゝのかき垂なへりけるかうやがこのさう
しをこそこゝよとて、をこをなへりしが、ワかのどい
なういと取をうやまひさるべき取おほかりしかば、
まとよりをくれたるかたのいとゞなかくうごさ
すべくもこしざりしかば、むつかしくてへして
きよくあないしりなへる人のくちつきまては
めなれてこそあれとて、おかしくおぼいたる事ぞ
いとおしきや、（先行）うへいとまめやかにて、おどてへし
給ひんかきとゞめて、（明石ノ）姫君にもこをまりなべかる

けるもれをうくまも他のあるありしもむしこれ
そこあひてがれがミぬ人とゝ心ことまこそハどを
かりかれとの給ひ（源河）めざこのれ学（がく）問（もん）ま いとよう
なるんずべてかハ こそくこのめることまのうはて
しこぬるハさ後よりぬことあり あまごともいと
つきあるんハ口おしかんこゝ心のすぢを こゝ
よくしうしずもてしげめをきて おぐらかあるん
のこあん めやするべかりけるなどのこまひて ハ
西しるハおぼしもかけ○ばかへし（紫河）やまてんとあ
めるに これ（源ノ西しなくはこと）よりをしりへしこ後もざしんも
ひがくしうもんとそゞのし冥あふ（源ハ）あきけ

すてぬ此心にてうきぬふいと心やまぎれなり

(係)へさんといふにつけてもうつしさのよる

の衣をちひこそやまごとなりやとぞおもへれ

69038
6AP78